

主 題：忠実な同労者がもたらす励まし

聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章7－14節

テーマ：パウロの働きを支えた同労者たちはどのような人物だったか？

きょうから数回にわたって「忠実な同労者がもたらす励まし」について、特に4：7－14節を中心に一緒に学んでみたいと思います。まずはいつものようにみことばをお読みしますので、それぞれ神様のことばによく耳を傾けてみてください。

コロサイ4：7－14

「：7 私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたの一部始終を知らせるでしょう。：8 私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。：9 また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。：10 私といっしょに囚人となっているアリストアルコが、あなたがたによろしくと言っていきます。パルナバのいとこであるマルコも同じです——この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようという指示をあなたがたは受けています。——：11 ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っていきます。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となってくれました。：12 あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパフラスが、あなたがたによろしくと言っていきます。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。：13 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。：14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っていきます。」

皆さんは、映画やドラマの最後に流れる“エンドロール”というものに、関心払ったことはあるでしょうか？先日、私は久しぶりに映画館の雰囲気味わいたくなって、一つの映画を見に行きました。その映画自体は普通の内容でした。でも終わりに流れてくるエンドロールをふと眺めながら、改めて一つの作品を作るために関わっている人たちの多さに非常に驚かされました。そう思ったことはありません？画面上で実際に演技している俳優や女優は作品の一部にしか過ぎず、それ以外に携わっている人たちの多いこと多いこと。エンドロールの中には、その映画の一場面にしか登場しないような人の名前も挙げられていれば、そもそも映像には全く出ることもないような、画面の後ろでさまざまな働きをなしている人々の名前も数多くあります。その内訳にしても、脚本担当に撮影担当から、音楽担当に美術担当、衣装担当に編集担当、またそのほかにもいろいろな保険会社の名前に至るまで、いったいいつまでこの名前の羅列は続くのかと思うほど、事細かに記されているのです。そして私たちが知っているのは、そんな表には出ない、あまり目立たない人たちの働きこそが、一つの作品を完成させさせるのには決して欠かせないものだということです。

きょうから私たちが考えていきたいこと、それは、そういったあまり人々の間では知られていないような、あまり人々には見えていないような部分で、パウロとともに忠実に仕えていた働き人たちです。確かにこれから見ていくひとりひとは、例えばあのペテロやヨハネといっただれもが知っているような人物ではないでしょう。しかしそのような者たちの働きこそ、パウロの心を励まし、またみことばや福音の前進にとっても欠かせないものになりました。一見何でもない普通に思えるそんな人たちの働き

が、非常に重要な影響を周りに及ぼすことになるのです。では、いったい彼らはどんな存在だったのでしょうか？どんな模範を今の私たちにも残してくれているのでしょうか？

7-14節の部分を最初に読んだ時に、気づきました？この中でパウロは、ともに働いていた同労者の姿を全部で8名挙げていました。ですから私たちはこの箇所から8名の同労者の姿を見て取ることができますが、きょうはその中の二人だけを一緒に考えたいと思います。ぜひ皆さん、一見普通に思える人たちがどんなふうに忠実に歩もうとしていたのか、そのことに目を向けてみてください。そして自分自身の歩みと照らし合わせて考えてみてください。では早速、一人目の同労者から一緒に考えてみましょう。

1. テキコ 7-8節

まず一人目は、テキコです。7節を見るとこんなふうになっていますね。「私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、」と。さて皆さん、今この名前を聞いて、彼がどんな人物だったか頭に思い浮かんでいる人はいるでしょうか？おそらく多くの方があまり彼のことを知らないかもしれません。いったいこのテキコはパウロとどんな関係にあったのでしょうか？みことばは、そんな彼の姿を少なからず私たちに教えてくれます。新約聖書の中を見てみると、彼の名前は全部で5回出てきますが、最初に見て取れるのが使徒20:4です。こんなふうになっています。「プロの子であるベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリストアルコとセクンド、デルベ人ガイオ、テモテ、アジヤ人テキコとトロピモは、パウロに同行していたが、」「アジヤ人テキコは、パウロに同行していた」と。でも、これだけ読んでもあまり何のことか私たちには分かりません。では、いったい何のためにテキコはパウロと一緒に旅をしていたのでしょうか？皆さん、ここで大切になるのは何ですか？もちろん、文脈です！だからこそ少し戻って19章を見ると、19:8-10にこんなふうに書かれていました。「:8 それから、パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。:9 しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。:10 これが二年の間続いたので、アジヤに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」と。覚えていますか？パウロはこの時、第三次宣教旅行中の真っ只中にありました。彼はその道中にアジヤの町の一つであったエペソにやって来て、そこで福音を大胆に宣べ伝え続けていたのです。それが、今読んだ8-10に書いていました。彼がそこでずっと伝えた結果、「アジヤに住む者はみな、…主のことばを聞くことになりました。アジヤ人だったテキコもその働きを通して救いへと導かれたのでしょうか。そして救われた後、テキコはほかの数名と一緒に、パウロと旅をすることになるのです。もちろんこの旅は最初から簡単なものでは全くありませんでした。皆さん今私たちは使徒19章を見ていますが、続きをずっと読んでいくと、何が起こっていたか？起こっていたのは、みことばを語っていたパウロに対して、エペソの町中で激しい騒動が引き起こされていたことが記されています。23節から見るとそんなことが書いています。パウロに対し激しい騒動が起こっていました。またこれに加えて、パウロはこのエペソの町を出発した後、マケドニヤ地方を通り、そしてエルサレムに戻るという計画を立てていました。それは、この時、極度の貧困によって苦しみを味わっていたエルサレムの兄弟姉妹を助けるためでした。マケドニヤであったりアカヤ…そういった地方を通って行き、そこにある異邦人の教会を巡ることによって彼らから献金を集めようとしていたのです。それが、その宣教旅行の目的の一つでもありました。地図を見ても分かるように、パウロはエペソを出発し、海を渡り、テサロニケ行き、そしてコリントを廻り、最終的にはエルサレムへと戻っていくのです。その旅に同行していたのが使徒20:4で挙げられていたメンバー、またテキコだったのです。

ちょっと想像してみてください。この当時、もちろん車や飛行機があったわけではありません。人々は長い間、時間をかけて徒歩や船を使って移動しなければなりませんでした。もちろんそんな旅には、

病気や怪我だけでなく、いのちの危険も伴いました。またテキコが結婚していたのかどうかは私たちにはわかりません。でも旅に際して、彼は慣れ親しんでいた家や土地を離れて、家族や友人と会うことさえ、しばらくの間できなくなりました。テキコは旅をすることに際して、大きな犠牲を払わなければならなかったのです。しかしそれでもなお、テキコは旅に出ました。すべてを置いていったとしても、彼は愛するパウロにつき従おうとしたのです。

これだけ聞いても、彼が持っていた仕える者としての犠牲的な心を見て取ることができません？でもこれだけではありません。このパウロとの旅というのは、始まりが難しさを伴うものであっただけでなく、その終わりにも困難が待っていました。さっきも言いましたが、パウロはいろんなところを通過してエルサレムに向かって行ったのです。そのパウロに対して人々は何度も何度も警告を発していました。21:4の中頃からこのように書いていますね。「…彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようにと、しきりにパウロに忠告した。」そして少し進んで今度は12節を見るとこのように書いていました。

「:12 私たちはこれを聞いて、土地の人たちといっしょになって、パウロに、エルサレムには上らないよう頼んだ。:13 するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と答えた。」エルサレム向かっていこうとしているそのパウロに対して、「絶対に行かないでください。そこには苦しみが待っているから、だから行かないでください。」と頼み込んでいたのです。もちろん、そのことを一緒に旅をしている人たちも聞いていたでしょう。それだけではありません。パウロ自身もエルサレムに着けば、そこに大きな苦しみや困難が待ち受けていることをわかっていたのです。だからこそ彼もこんなふうに答えています。13節「:13 するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と答えた。」と。考えてみてください。間違いなく旅を一緒にしていたテキコたちは周りの人たちの声も聞いていたし、このパウロの覚悟も耳にしていたでしょう。目的地に着けば、すべて終わりではありませんでした。目的地に着いたらそこにはさらに大きな困難が待っていると、彼らは知っていたのです。テキコもそのことを知っていました。皆さん、私たちだったらどうします？私たちはよくいろんな時に旅行の計画を立てることがあります。私たちは目的地に喜ばしいことが待っているから、その道中苦しくても、最後到達すればどうにかなるかと思うのです。でもテキコやパウロたちは、最初が苦しかっただけではありません。道中苦しかっただけではありません。その最終目的地にさえ、さらに大きな苦しみがあるということをわかっていたのです。そうしたらこう思いませんか？ちょっと途中でこの旅をやめようかな…と。しかもパウロはいずれ捕まることもわかっていました。自分の愛している人が一緒に目的地まで行って、そして捕まることをテキコたちもわかっていたのです。いずれ捕まるとわかっている人と一緒に歩んでいても仕方ないのではないか、と思ったりするかもしれません。テキコはすべてのものを犠牲にしてついていきました。でもすべてのことを犠牲にしてついていったとしても、その人物が捕まってしまうなら、その人物が死んでしまうかもしれないのなら、何の意味もないのかもしれない…と考えてもおかしくはなかったでしょう。でもテキコは途中で止めることはありませんでした。テキコは途中で諦めることもありませんでした。パウロの行くところであれば、彼はどこにでもついていきました。困難があればともに困難を味わい、苦しみがあればともに苦しみをくぐり、たとえどんな犠牲を払ったとしても、テキコはパウロの働きを忠実に支え続けようとしていたのです。これだけ聞いてもすごい人物だと思いませんか？確かに彼は仕える者としての心というものを持っていました。神様の働き、また愛するだれかのために大きな犠牲を払って仕えるということをいとわない人物だったのです。これだけ聞いても十分すばらしい同労者でした。

でもそんな彼の持っている特徴をもう一つだけ挙げるとすれば、テキコは犠牲的であっただけではなく、どんな時も、出てくる必要に応じようとした人物でもありました。そのことがわかるのは、テトス

3章。ご存じの通りこのテトスへの手紙は、パウロが、クレテ島というところで牧会をしていたパウロの弟子の一人、テトスに宛てて書き送ったものでした。そしてそのテトスに対して書いた手紙の中に、こんなことばが書き記されているのです。3：12にこのように書いています。「私がアルテマスかテキコをあなたのもとに送ったら、あなたは、何としてでも、ニコポリにいる私のところに来てください。私はそこで冬を過ごすことに決めています。」パウロはここで愛するテトスに対して、自分のところに来てほしいと願っていました。彼は自分の愛しているその弟子と一緒に時間を過ごして交わりをし、励ましを受けたいとそう思っていたのです。でも同時に、テトスはこの時大きな責任を担っていました。パウロから任されたクレテ島にあって、牧会の働きをなしていたのです。ちなみにこのクレテ島での牧会というものは、全然簡単なものではありませんでした。というのも、パウロはこの島の人たちのことに関して、こんなことばをテトスに残したのです。テトス1：10-12を見るとこのように書いています。「：10 実には、反抗的な者、空論に走る者、人を惑わす者が多くいます。特に、割礼を受けた人々がそうです。：11 彼らの口を封じなければいけません。彼らは、不正な利を得るために、教えるはいけないことを教え、家々を破壊しています。：12 彼らと同国人であるひとりの預言者がこう言いました。「クレテ人は昔からのうそつき、悪いけだもの、なまけ者の食いしんぼう。」皆さん想像できません？この島で、このような人たちがいる中で、テトスは牧会の働きをしていたのです。うそつきな者たち、いろんな間違っただけのことを教えるそのような者たちに対して、テトスはそれらの口を封じなければいけませんでした。それだけではなくて、愛する兄弟姉妹たちに仕えて、教え戒めてあげて、養い育てていく必要があったのです。どう考えたとしてもテトスの働きは大変な困難を伴うものでした。

ではここで考えてみてください。パウロはテトスに会うことを強く望んでいました。テトスは非常に困難で大切な務めを果たしていました。そんなテトスがパウロに会いに行こうとすれば、彼の責任を代わりに担うことができる、信頼できる人物が必要だったのです。彼の後を託すことのできる人物、それが必要でした。いったいその責任を果たすことのできた人物とはだれだったのでしょうか？それこそまさに、テキコでした。パウロは言っていましたね。「私がアルテマスかテキコをあなたのもとに送ったら、…私のところに来てください。」と。テキコはどんな時も準備ができていました。何らかの必要が生じることがあればいつでもそれに応じることのできる、そんな人物だったのです。

そして驚くべきなのは、このようにしてテキコがだれかの代わりになったというのは、これ一回きりの話ではなかったということです。今度はちょっと戻ってⅡテモテ4：9-12、ご存じの通りこの手紙は、パウロの愛していた別の弟子、エペソで牧会をしていたテモテに書き送ったものでした。そしてその手紙の中にもこんなことばが書き記されているのです。「：9 あなたは、何とかして、早く私のところに来てください。：10 デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう、また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに行ったからです。：11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。：12 私はテキコをエペソに遣わしました。」彼は自分の愛している子、テモテに会いたいと強く願っていました。このⅡテモテこそ、パウロが最後に書き記したものでした。自分の人生がもう終わりに近づいていることをわかっていたパウロは、最後にもう一度だけ、テモテに一目でも会って、彼から慰めや励ましを受けたいと心から願っていたのです。でも同時に、テモテはこの時大きな責任を担っていました。当時のアジアにおいて最も栄えていたと言っても過言でない大都市エペソにあって、牧会の働きをなしていたのです。テモテがパウロに会いに行くとなると、彼の代わりに果たすことのできる、信頼できる人物が欠かせませんでした。いったいその責任を果たすことのできた人物とはだれだったのでしょうか？それこそ、テキコだったのです。パウロははっきりと口にしていましたね。12節で、「私はテキコをエペソに遣わしました。」と。改めて考えてみてください。テキコはパウロやペテロのような使徒ではありませんでした。彼はパウロの働きを通して救われた、ひとりの信仰者だったのです。私たちと同じようにイエス・キリストの福音を聞いて、そし

てイエス・キリストを信じ救われた、そんなひとりの同じ信仰者でした。でもその彼は、何よりも神様を愛してキリストに従おうとしていたからこそ、パウロや兄弟姉妹のために熱心に仕えようとしていたのです。どんな犠牲を払うことになったとしても、進んでそれを支払い、どんな必要があったとしても、喜んでそれを満たそうとしていました。テキコという人物はまさに信頼することのできた、そんな仕える者だったのです。

だからこそ、そんな彼をパウロも大いに称賛していました。きょうのテキストであるコロサイに戻って、コロサイ4：7をもう一度見ると、そこでパウロは特に三つのことばを用いて彼のことを表現しています。「私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、…」と。

1) 愛する兄弟

一つ目に「愛する兄弟」と言われていました。この「愛する」ということば、これには「深い愛情」や「親しみ」といった意味が含まれています。要するに、パウロにとってテキコというのは、同じ神様の家族に属している、心から愛する、心から親しみを抱くそんな兄弟のひとりだったというわけです。

2) 忠実な奉仕者

二つ目に「忠実な奉仕者」と言われていました。ここで使われている「忠実な」ということばには、「信頼することができる」とか「忠実で頼りになる」といった意味が含まれています。確かに今まで見てきたことを考えれば、そうですよね。パウロにとってテキコというのは、いつも忠実で、いつでも信頼することのできる、そんな奉仕者のひとりだったというわけです。

3) 同労のしもべ

そして三つ目に、「同労のしもべ」と言われていました。この「同労のしもべ」と訳されていることばは、もともとは一つのことばで、「奴隷」を意味することばの頭に「一緒に」ということばがくっついてできているものでした。ですからそのまま文字どおり言うなら、「一緒に奴隷」というのがこのことばの意味だったのです。「一緒に奴隷」…何を言わんとしたかわかりますか？キリストの奴隷として仕えていたパウロ。テキコは、そんなパウロと一緒にあって同じように仕えている奴隷のひとりだったというわけです。パウロはテキコとの間に親密な関係を見ていたのです。

この三つのことばを考えても、彼に対するパウロの大きな愛情や喜びが見て取れませんか？間違いなくパウロはテキコのことを心の底から信頼していたことでしょう。そしてそれゆえに、パウロは自分が置かれている状況についてコロサイの兄弟姉妹に伝えるという重要な役割を、テキコに与えたのです。そのことが4：8にこう書いていました。「私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。」当然ですが、だれでも良かったわけではありません。パウロが捉えられているローマにあって何をなしているのか、どんな状況に置かれているのかということを忠実に伝えて、人々の心を励ましてあげて、また何よりもこのコロサイの手紙をコロサイの教会に携えて持っていくという責任を果たすことができるためには、その人物はだれよりも信頼できる者でなくてはなりません。そしてそんな働きを担っていた人物こそ、テキコだったのです。すばらしい模範だと思いませんか？テキコはまさに神様と人ともに犠牲を払って仕えた者でした。

これまでのことをまとめて考えてみてください。テキコは、パウロといつもともにいようとしていました。パウロが旅の同行者が必要となれば、それなら私はすべて置いてでもついて行きます、とそう歩んだ人物でした。パウロとともに歩いていくその中にあって、この先に痛みや迫害が待っているとわかっていても、それでも私はあなたに変わらずついて行きます、と言って歩んだ人物でした。ほかの兄弟姉妹たちが助けを求めているとわかったら、それなら私が行きます、私がおの代りにそこに行きます、とそうやって歩んだ人物でした。また教会に対して近況や手紙を届けるような必要が出てきたなら、それなら私がそれを喜んでやります、私をそのために使ってください、とそう歩んだ人物でした。こうして

彼は、小さな事から大きな事まで、たとえどんな働きであったとしても、それを忠実に果たそうとしていました。みずから犠牲を払って、どんな必要であったとしても熱心にそれを満たそうとしていました。だからこそ、そんな仕える者としての彼の存在は、パウロにとって、またほかの兄弟姉妹たちにとっての励ましとなったのです。

そうすると、少し自分自身の歩みを振り返って考えてみましょう。私たち自身の仕えるという態度は、どんなものでしょうか？自分にとって都合の良い時だけ仕えたり、自分にとって都合のよくないときには仕えない、そのようなものになっていないでしょうか？人目につくような大きな働きであろうと、だれの目にもつかないような隠れた働きであろうと、私たちは変わらずに喜んで仕えようとしているのでしょうか？私たちは今、人から仕えられることよりも、人に仕えることを進んで求めて歩んでいるのでしょうか？忘れてはいけません。時に私たちは、例えばパウロやペテロのような人物を考えるときに、私たちが彼らの模範に倣って歩んでいこうとするその中であって、でもあの人たちは使徒だから…と、そんな言い訳をすることもあるかもしれません。でもこのテキコは使徒ではありませんでした。パウロたちの働きを通して、私たちと同じようにキリストの福音を聞き、それを信じ救われたたったひとりの信仰者だったのです。そしてその人物が神様を愛して、人を愛して、犠牲を払って仕えようとしてきました。皆さん、私たちはこれによって励ましを受けることができます。私たちも同じように歩むことができるということです。何か特別なものを持っているからそれができるというわけではありません。神様を愛し、人を愛した者がそのように歩んでいたその模範に倣って、私たちも歩んでいくことができます。そして何よりも皆さん、あのイエス様が、ご自分がこの世に来られた目的をはっきりと口にされていました。今回の月のみことばにも選びましたが、マルコ 10 : 45 にこう書いていたのです。

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」最も偉大なお方が、仕えられることよりも仕えることを求めたのだとすれば、テキコが仕えられることよりも仕えることを求めて、自分のものをささげて生きていこうとしていたのであれば、同じ信仰者である私たちひとりひとは、いったいどのようにして神様と人々に犠牲を払って仕えていこうとするのでしょうか？喜んで犠牲を払って、どんな時も必要に応じた人物、それが、一人目の同労者テキコでした。

2. オネシモ 9節

次に、二人目の同労者を考えてみましょう。二人目は、オネシモです。9節にこのように続いています。「また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。」どうでしょう？さっきのテキコと違って、このオネシモについてはすでにご存じの方もいるかもしれません。でもよく理解するために、改めてこの人物の歩みを少し思い返してみてください。オネシモという人物は、もともとコロサイの出身で、ピレモンと呼ばれる主人に仕えていた奴隷でした。ピレモンへの手紙のピレモンのことです。しかしある日のこと、具体的にどんな状況だったのか分かりません。でも何らかの罪を犯した彼は、その家から逃げ出すことになりました。そして逃げ出した後、彼はローマへとたどり着くのです。どうしてローマに行ったのかは分かりません。確かにこの当時のローマは非常に大きな都市でした。町には数百万人以上の人たちが住んでいたと考えている人たちもいます。だからこそそんな人の多いところに行けば、だれに気づかれることもなくて、再び家に引き戻されるようなことはないと考えていたのかもしれませんが、でも、主権なる神様のご計画は違いました。驚くことにこのオネシモは、そうやって逃げていった先、このローマにあって、どういうわけかパウロの捉えられていたその家にたどり着くわけです。そして当然、自分のもとにやってきた者に対して、言うまでもなくパウロはキリストの福音を語りました。そしてその福音を信じた彼は、恵みによって救われていたのです。オネシモは完全に変えられました。まさにみことばが言うように「だれでもキリストのうちにいるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去っ

て、見よ、すべてが新しくなりました。」（Ⅱコリント5：17）まさにそのように彼は変えられました。かつて神様に逆らう罪人だったそのオネシモは、心から悔い改めて、そして神様を愛し、神様の前に喜ばれることを追い求める者になりました。そして、そんな彼がコロサイに、何より主人であるピレモンのもとへと帰る日がやって来るわけです。もちろんこれは容易な選択ではありません。当時のローマの法律によると、逃げ出した奴隷を主人が厳しく罰することであったり、処刑することさえできました。ですからオネシモにとって家に戻るということは、非常に難しいことではあったのです。それでもパウロはピレモンのもとにオネシモを送り返そうとし、そして心から悔い改めていたオネシモ自身も、それに従って過ちを正そうとしたわけです。

さて、この背景を頭に入れた上でもう一度9節を見ていただくと、パウロはそんなオネシモを何て表現しています？どんなふうに呼んでいました？彼はこう述べていました。「**忠実な愛する兄弟オネシモ**」と。ここで皆さん気づきますか？さっき一緒に見たテキコに用いられていたのと同じことばがオネシモに対しても使われていたのです。「**忠実な**」と書いていました。「**忠実な**」とはどんな意味でした？これは「信頼することのできる」とか「忠実で頼りになる」ということを表していました。また「**愛する**」とありますが、「**愛する**」とはどんな意味でした？これは「深い愛情」であったり、「**親しみ**」というものを表していました。つまり、長い期間ともいって仕え続けてくれていたそのテキコだけではありません。パウロは、確かにオネシモが過去に犯した大きな罪や過ちというものもよくわかっていました。でも同時に、キリストによって救われて新しく造り変えられたそんなオネシモのことを、同じ神様の家族に属するひとりの兄弟として心から愛していたのです。そしてそれゆえにパウロは、コロサイの教会の兄弟姉妹に、自分の様子を伝え、このコロサイの手紙を持っていくという大切な責任をこのオネシモとテキコに託したのです。9節に書いていましたね。「…このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。」と。皆さん、これはすごい信頼だと思いませんか？オネシモは決して完全ではありませんでした。過去に過ちを犯していたのです。でも、そんな彼もキリストにあって変えられました。以前、神様に逆らっていたその者が救われて、神様に従う者へと変えられました。以前しもべであることから逃げ出したその彼が救われて、パウロや兄弟姉妹に仕える者へと変えられました。かつては罪を犯していた犯罪人でした。しかしそれでもなお、ただ神様の恵みによって救われ新しく造り変えられた、そんな仕える者こそ、パウロが愛していた同労者オネシモだったのです。

そしてこんなオネシモの姿からも私たちは大切なことを学ぶことができます。それは、オネシモがそうであったように、キリストを知る以前の私たちもみな例外なく神様に逆らう者だったということです。私たちも自分の望むままにさまざまな悪を行い、罪に怒りを燃やしておられるその神様の御怒りを自分の上に積み上げていました。間違いなく私たちは滅びのみがふさわしい存在でした。しかしそして神様に敵対していた私たちもオネシモと同じように、ただ神様の恵みによって、キリストを信じる信仰によって救われ、新しく造り変えられました。ただ神様のあわれみによって、私たちも今神様を何よりも愛する者として、そんな新しい者として造り変えられたのです。もちろん今もいろんな点に置いて不十分さを覚えます。私たちもかつて大きな罪を犯したこともあるでしょう。でもそんな弱い私たちでさえも、神様がオネシモを用いたようにご自身の恵みによって私たちのことも力強め、働きのために用いてくださるということです。かつて大きな問題を抱えていたそんな私たちでさえも、不十分な私たちでさえも、神様は恵みの力によってご自身の目的のために用いることができるということです。そして覚えていますか？パウロもまさにこんなことばを口にしていました。Ⅰコリント15：9-10「：9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。：10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」パウロは確かに自分自身の罪深さというものをだれよりもよくわかっていた人物でし

た。キリストを知る前、どんな恐ろしいことをしていたのかということも彼はよくわかっていました。しかし同時に、そんな弱い自分のうちに働く、新しく造られた者のうちに働くその神様の恵みに信頼して、彼はどんな時も喜んで神様と人とのために働いていたのです。パウロだけではありません。オネシモも同じです。彼も決して完全ではありません。でも、神様はそんな不完全な者のうちに働いて、ますますその者をキリスト似た者へと変えられ、そしてそれを通して何よりもご自身の栄光を現されるのです。だとすれば私たち自身も罪を赦された者として感謝をもって歩むことができます。弱さは持っています。私たちも不完全です。でも、その弱さを正直に認めて、神様の恵みの力に拠り頼みながら歩いていくことができます。罪を赦されたことを感謝しながら、主の力に拠り頼みながら主のために働く者として歩み続けていくことができるわけです。そのようにパウロも歩みました。そして、あのオネシモも歩みました。ひとりの信仰者がそのように歩んだわけです。

テキコとオネシモ。皆さん、きょうはパウロとともに働いた二人の同労者の姿を考えました。どうでした？確かに私たちは普段そのような人たちのことは考えないかもしれませんが。みことばを見ているあまり目につかないような人たちかもしれません。読んでいても読み飛ばしてしまうかもしれません。でも、そんな彼らが神様と教会のためになしていた働きというのは、非常に大きなものでした。私たちと同じようにキリストの福音によって救われたひとりの信仰者が忠実に歩み続けていたところには、大きな励ましがあったのです。神様と人ともに喜んで犠牲を払って仕えていたテキコ、罪を赦されて恵みの力によって仕えていたオネシモ。そんな彼らのすばらしい模範に私たちも倣うことができます。神様と人ともに仕える者として、今週も主の栄光を現すためにともに歩いていきましょう。